

CIFER・コア

矢持 進 理事の最終講義について

演題：プランクトンから都市へ「おおさかの海と川に生まれ」

2016年2月16日（火）に大阪市立大学大学院教授である矢持 進理事の最終講義が同大学工学部大講義室において行われ、卒業生、企業人、行政や学会関係者、漁師さんなどが聴講しほぼ満席でした。



先生は1973年3月に鹿児島大学水産学部を卒業し、同年4月から大阪府の水産試験場に勤務、1988年には東京大学から農学博士号を授与されました。

その後、1999年4月、大阪市立大学工学部環境都市工学科に赴任され、水産と工学を融合した研究と60名以上の研究室学生指導に努めてられました。

講義の冒頭、1960年頃の堺港で魚釣りをするかわいい少年の写真が登場。その時は「水質汚濁」で魚は釣れなかったそうですが、その後、大阪の海を舞台に大きな研究成果を釣り上げられたのだと思います。

水産試験場に出勤途上、谷川漁港で漁業者の声---漁に出かけるときはきれいな海なのに、漁から戻ると海が汚れている---と聞いて、ヘテロシグマアカシオの日周鉛直運動の解明に繋がります。

試験場時代からの自らの手による水質調査結果をもとに、湾奥部の水質が1973年の湾口部並みになっていることや、湾口・湾奥の栄養塩の偏在、南港野鳥園の調査、大和川のアユの話など一般の方にも興味深い講義が続きました。

講義終了後、CIFER・コア上嶋英機理事長からの後輩へのメッセージというリクエスに、①先輩の懐に飛び込んで、技術や技などを盗みとれ、②フィールドにどんどん出かけ、フィールドから学べ、と仰いました。谷川漁港のアカシオのように現場には仕事のヒントがあふれているということでしょうか。

大講義室には研究室を巣立った卒業生が全国から集まっており、熊本から駆けつけた幼児を抱いた女性の卒業生が花束を贈呈しました。



先生の益々のご活躍とご健勝を祈念します。